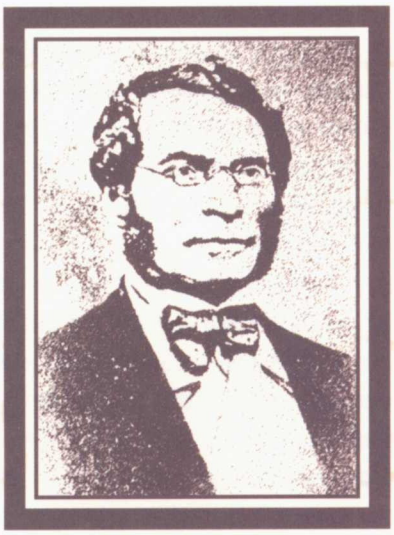
琉球大学附属図書館報
びぶりお
http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/
August 2004
140
Vol.37 No.2
ISSN: 0286-8229



ベッテルハイム
――――19世紀の琉球に伝道した英宣教医

text: 照屋善彦　*TERUYA, Yoshihiko*
琉球大学名誉教授。西洋史専攻。主な論著「19 世紀琉球の風俗：欧米人の見聞録」(風俗史学, 2000)、『戦後沖縄とアメリカ』(共編, 1995)

目　次

ベッテルハイム：19世紀の琉球に伝道した英宣教医（照屋善彦）..... 1
ベッテルハイムの日記と書簡（A.P. ジェンキンズ）..... 4
仲原善忠文庫画像データベースを公開 8
2003 年度新収蔵沖縄関係資料のご紹介 9
「EU 資料展」開催 10
データベース検索システム課金制度の廃止 11
ILL サービスの変更 11
お知らせ 12

Bernard Jean Bettelheim, 1811 ～ 1870

A

今年2004年は、英人宣教師ベッテルハイム*が8年余の苦難な伝道活動に終止符を打ち琉球を去った1854年から1世紀半になる「離沖150周年」という記念すべき年である。キリスト教禁制の下の本邦におけるプロテスタントの伝道は、1846年琉球の那覇において彼の手で始められた。ベッテルハイムは、日本におけるプロテスタント伝道の先駆者であるだけでなく、日本プロテスタント系の聖書翻訳史上で、彼が那覇で翻訳した聖書は、K. ギュツラフやS.W. ウィリアムズに次いで3番目に古いという栄誉が与えられている。さらに彼は幕末の日本において、西洋医学の導入者の一人として銘記されている。このようにベッテルハイムは、日本のキリスト教史・聖書翻訳史・医学史・言語学史・幕末外交史などにその名が出てくる人物である。

B ベッテルハイムの生い立ち・琉球海軍伝道会

1846 ～ 1854, 琉球王尚育19 ～尚泰7

宣教師であり医者でもあったベッテルハイムは、沖縄で8年間*滞在した。彼がかけていた眼鏡は当時の琉球の人々には奇異に感じられたとみえて、ナンミンヌガンチョー（波之上の眼鏡）とか、彼が常に西洋犬を連れていたのでイヌガンチョー(犬眼鏡)などのあだ名で呼ばれていた。「波之上」とは、彼が滞在した護国寺付近の地名である。また漢字名を「伯徳令」と普通綴る。ベッテルハイムは1811年、ハンガリーのブレスブルグのユダヤ系の家庭で生まれた。才能に恵まれ恐ろしく早熟だった彼は、13歳の時から親元を離れ、語学教師をしながら自活の道を歩んだという。1836年、彼はイタリアのパデュア大学から医師免許状を授与され医師になり、エジプト海軍やトルコ陸軍で軍医として働いた。1840年、トルコのスミルナ付近で、英国教会の牧師から洗礼を受けてキリスト教徒となる。改宗後、海外での宣教活動を志し、英国に渡って準備をした。1843年、ロンドンで英国女性エリザベスと結婚して英国に帰化した。その頃ロンドンで、琉球におけるキリスト教の布教を唯一の目的とする琉球海軍伝道会が設立された。創立者は1816年英海軍バジル・ホール艦長と共に琉球を訪れた元海軍大尉クリフォードである。帰国後に退役したクリフォードは、琉球住民のことを忘れることができなかった。彼は英国人が琉球住民から受けた数々の恩義*に対する返礼として、真の神の福音（キリスト教）を琉球に贈ろうと決心した。そして1845年、伝道会は琉球へ派遣する宣教師としてベッテルハイムを採用した。

1797年のプロビデンス号や、1840年のインディアン・オーク号の乗組員の救援・救助など

C ベッテルハイムの琉球での伝道と医療活動

ベッテルハイム一家（妻と2人の子供）は、香港で雇った中国語の通訳劉と共に、1846年4月30日、商船で那覇港に到着した。任地を目前にして胸を踊らせていたベッテルハイムを港で待っていたのは、琉球側の丁重な退去要請だった。実はその2年前の1844年、フランス海軍の武威のもとでフランス人宣教師フォルカード神父が中国人の高とともに入国し、那覇の泊にある天久聖現寺に滞在しており、琉球側はその対応に難渋していたからである。ところがベッテルハイムは、英国人である自分も仏国人のフォルカード同様に沖縄に滞在する権利があると主張して、強引に那覇港に上陸してしまった。こうしてベッテルハイムの琉球伝道生活は、最初から琉球側との衝突から始まったのである。

やがて一家はフランス人神父のいる泊から離れた波之上の護国寺を住居に指定され、ここで一家は琉球での8年余の苦渋に満ちた生活を始めた。家族が滞在した護国寺境内の前後には番所が常設され、筑佐事（警吏）が詰めて一家の行動を厳重に監視した。外出の際にも常に尾行がつき、住民との接触は警吏によって妨害された。王府は一家へ使用人を派遣し、日用品や食料を無料で*提供した。しかし最初の1年半、ベッテルハイムは比較的自由に行動でき、布教と施療を通して多くの住民と接触していることが、彼の日記や伝道会への報告書からわかる。彼はこの時期を後日回顧して、「宣教の黄金時代」と懐かしがった。この「黄金時代」を終わらせたのが、1847年10月国王尚育の国葬の時の殴打事件である。国王の葬儀に参加しようとしたベッテルハイム夫妻と2人の仏宣教師は、首里の入口で群衆に取り囲まれて殴打された。以後官憲の英仏人に対する監視体制が強化され、住民との接触がほとんど絶たれて英仏宣教師の行動は著しく制限された。もちろん街頭における伝道や医療活動も困難を極めた。しかしベッテルハイムはあらゆる妨害にも屈せず、1854年7月に沖縄を去るまで、精力的かつ強引に街頭での説教や那覇の民家への宗教冊子の投入を超人的に続けた。医者としての活動にも顕著なものがある。伝道活動の際には薬箱も携帯し、随時那覇

ベッテルハイムは代金を支払っていたが、王府は外国人からは恩恵を受けないという方針であったため、彼の帰国時には支払われた代金等のすべてを返却した。

の庶民への施療をした。また1848年ごろ那覇の医師仲地紀仁と交友を結び、仲地医師を通して沖縄における最初の西洋式の牛痘法を導入した。

D ベッテルハイムの聖書翻訳・米国への移住

ベッテルハイムの住民への医療サービスと布教の他に、彼が精力と時間を注いだのが聖書の翻訳であった。彼は1847年2月からルカ伝の翻訳を始めて、同年7月には一応終わっている。ルカ伝訳了後は、ヨハネ伝・ロマ書・使徒行伝・マタイ伝・マルコ伝を翻訳していった。翻訳作業を、護国寺に詰めていた役人（通事、通訳）に手伝ってもらっている。もちろん鎖国下で禁制の宗教書であるため、通事達の協力は極めて消極的なものであったので、ベッテルハイムの翻訳した文中に意味不明なところや誤記が多い。彼は翻訳した聖書を一日でも早く出版して伝道に役立てたいと思っていたので、遅々として進展しない翻訳作業に最後まで焦りを感じていた。強度の近眼のうえ、沖縄滞在の後半期から次第に健康まで損ねてきた彼にとって、翻訳事業は真に血と汗の結晶といえるだろう。彼の聖書の翻訳は3種類ある。1851年までに訳したルカ伝・使徒行伝・ヨハネ伝・ロマ書が琉球語の口語訳である。この琉球語訳が日本本土で使用できないことに気づき、1851年以後の翻訳作業は漢和対訳の『路加伝福音書』『馬太伝福音書』『馬可伝福音書』である。後年、日本本土向けの聖書和訳もウィーンで出版された。1854年2月、後任のG.H.モートン師が那覇に着任したので、同年7月、ベッテルハイムはペリー艦隊に便乗して那覇を去った。翌年英国への帰途、立ち寄った米国に永住することになる。数年ニューヨークに住んだ後、イリノイ州に移住した。彼は南北戦争中、北軍の軍医として活躍した。戦後一家はミズーリ州に移ったが、1870年2月、彼は肺炎がもとで亡くなった。享年59歳であった。その彼が、アジアの一角の沖縄で8年余、あらゆる困難と闘いながら伝道・医療・翻訳をやりとげたことは、人間の尊い生き方の一つとして高く評価されるべきであろう。

E ベッテルハイム研究とブール文庫の資料

筆者は琉球大学在職中の1969年、ベッテルハイム研究で学位を取得した*が、その際の論文作成のため、附属図書館所蔵のベッテルハイムに関する資料を使用させてもらったことに感謝の意を表します。当時の附属図書館は蔵書数に乏しかったが、ベッテルハイムに関する英文資料がアメリカ人でメソジスト派の宣教師ブール師*によって多数収集されていた。ブール師は、本邦における最初のプロテスタント宣教師としてのベッテルハイムに深く傾倒し、精力的に同師関係の資料を私費を投じて収集された。ロンドンにある英国教会伝道会は、ベッテルハイムを派遣した琉球海軍伝道会が解散した後、同伝道会の資料を保存していた。その中には、ベッテルハイムが那覇滞在中に伝道会に送付した日記・報告書・書簡類や同伝道会の年次会報などがマイクロフィルム化された膨大な資料群があった。さらにブール師は米国に帰ってからも、米国在住のベッテルハイムの子孫からロンドンにないベッテルハイムの日記・書簡類の収集や翻刻も試みられていた。ブール師は、ベッテルハイムの業績を日本文で出版するため伊波普猷・東恩納寛惇・真境名安興らの序文（直筆）なども揃えて準備していたが、残念ながら何かの事情で出版できず、附属図書館のブール文庫に草稿のまま残っている*。ブール師はこれらの膨大な資料を将来の研究者のため附属図書館に寄贈された。筆者は同師の了解を得て研究に活用させてもらった。筆者も留学中にご子孫と接触し、日記・書簡類を翻刻し上記学位論文に利用させてもらった。後日ご子孫のハンプトン夫人は筆者に日記・書簡類を贈呈されたが、筆者は同夫人の了解を得てその資料をすべて附属図書館に寄贈した。

Ph.D., 歴史学, コロラド大学
Bernard J. Bettelheim and Okinawa: A Study of the First Protestant Missionary to the Island Kingdom, 1846 ～ 1854

Earl Rankin Bull, 1876 ～ 1974

「ペルリ提督前の文明指導者伯徳令傳：教界の偉人」(1926)

F ベッテルハイム手稿資料と翻刻作業

ベッテルハイムは語学に関しては天才的であったが、出生地ハンガリーから欧州各国を歴訪したためか、その書体に著しい癖がある上に筆記に無頓着でかつ無類の悪筆であり、彼の手稿資料は判読が極めて困難でブール師や筆者を含めた内外の研究者を悩ませてきた。アメリカ人のブール師も翻刻も試みられていたようだが、その成果はあまり芳しくないようである。ベッテルハイムの直筆資料は、普通の人にはまったく歯が立たない悪筆で書かれ、かつ文法的にも誤りがままある。幸いにして現在沖縄には、オックスフォード大学で欧文古文書学の研究を修められた、沖縄県立芸大学術教授で沖縄県公文書館顧問のA.P.ジェンキンズ氏がおられる。ジェンキンズ氏は、現在琉球大学附属図書館でベッテルハイムの難解な手稿資料の翻刻作業に専念されていて、近い将来この尊い作業が附属図書館と沖縄県公文書館および沖縄県史料編集室との協力の成果として世に出ることを大いに期待している。

Bettelheim's Journal and Letters

ベッテルハイムの日記と書簡

A.P. ジェンキンズ　*A.P. Jenkins*
琉球大学法文学部講師。公・古文書管理に関する2つの資格を保有。来日前は英国の4大学で古文書学を教えた。主な論文「情報の共有：アーキビスト間及びアーキビストと利用者（琉球政府対米国民政府）往復文書ケーススタディ」（沖縄県公文書館研究紀要，2004）

A.P. Jenkins taught a Hobun-gakubu Graduate School course in Archive Administration for six years until 2003, and still teaches for the Policy Science and International Relations programmes. He holds two professional qualifications in Archive Administration, and used to instruct in Palæography at British universities.

訳：大城美也子　*OSHIRO, Miyako*

ベッテルハイムは、琉球について膨大な量の文書を残している。聖書の一部の琉球語訳、琉球語文法・語彙、医療報告、中国語から英語に訳した数多くの琉球王府宛の書簡が組み込まれた長い伝道医日記等である。日記は、支援者である英国琉球海軍伝道会への報告書として書かれている。彼は日記を1部は自身の保存用とするため、当時は世に出て間もないカーボン紙に薄い敷写用紙を重ねた複写器に、鉄筆を用いて記した。

英国琉球海軍伝道会とベッテルハイム自身のための2部の日記が存在すると考えられるが、予想は往々にしてがっかりさせられる結果に終わりがちである。印刷された本と異なり、手稿資料は一つしか存在せず、簡単に失われてしまう危険を常に伴っている。残念ながらベッテルハイムの日記や文書も例外ではない。

¶バーミンガム大学に保管されている手稿資料

英国琉球海軍伝道会は、1861年英国教会伝道会に統合され、英国琉球海軍伝道会が所有していた文書も英国教会伝道会に受け継がれた。そして1986年、それらの非現用文書はバーミンガム大学図書館に特別コレクションとして寄託された（ref.: CMS Archive: L/A1-19, L/F1/1-7）。ベッテルハイムは時折同じカーボン紙を繰り返し使用したので、文字が薄くなり読みづらい箇所も一部にあるが、良好な環境で保管されている。問題は日記の欠落部分である。1846年3月から4月等所々に短い欠落がある。大きな欠落は1846年10月11日から1850年9月後半まで、ベッテルハイムが滞在した8年間の内の4年間に相当する部分が抜けている。英国の公文書館（英国国立公文書館や、英国琉球海軍伝道会の支援者やその最も活発なメンバーらと結びつきのある公文書関連機関等）と、英国公文書を扱うWebサイト"Access to Archives（A2A）"に照会したが、欠落部分はまだみつかっていない。不思議なことに、ベッテルハイムが広東を訪れた1846年3月から4月の欠落部分は、英国琉球海軍伝道会書簡集に復刻が含まれており、欠落部分を埋め合わせることができる。何者かが復刻し、原本を元に戻さなかったか、あるいは破棄してしまった可能性も考えられる（詳しくは、http://www.mundus.ac.uk/cats/44/1226.htm を参照）。

¶琉球大学に保管されている手稿資料

ベッテルハイムが複写した一番上の原本は英国ではなく米国に持ち帰られた。残念ながら19世紀後半に家が火災に遭い、日記だけでなく他の書類もほとんど焼失してしまい、現在は自家製本された日記3冊と書簡集2冊が残っているのみである。

1969年の照屋善彦教授の博士論文を契機に、ベッテルハイムのご子孫の同意を得て、火災を免れた手稿資料を琉球大学附属図書館に寄贈していただくことができた。幸いなことに、バーミンガム大学図書館コレクションの日記から抜けていた部分が、3冊のうちの2冊に入っ

Bettelheim was a prolific writer on Ryukyu (e.g., translations into Ryukyuan language of parts of the Bible, a grammar and a vocabulary of the language, medical reports, and a lengthy medical missionary journal that later incorporated English translations of his frequent Chinese-language correspondence with the Ryukyuan authorities, etc.). The journal was required by his sponsors, the (British) Loochoo Naval Mission (LNM). He wrote it on a 'manifold writer', an early carbon-copy, folded-flimsy-paper, and stylus system, since he wished to keep one copy for himself.

We might, therefore, expect to find two versions of the journal, the LNM's and his own, but expectations of archival survival lead to many disappointments. Unlike printed books, manuscripts (MSS) are unique and, as such, much more prone to loss. That is, regrettably, the case with parts of the journal and some of his other MSS.

The Birmingham MSS

The LNM and its records were absorbed by the (British) Church Missionary Society (CMS) in 1861. In 1986, its non-current papers were deposited among the Special Collections at the University of Birmingham Library (UBL, ref.: CMS archive: L/A1-19, L/F1/1-7). They are in good condition though sometimes the MSS are pale since Bettelheim occasionally overused his carbon papers. A greater problem, though, is the gaps in the journal. Here and there are shorter missing passages, e.g. parts of Mar. and Apr. 1846, and others, but there is a yawning gap from 11 Oct. 1846 to late Sept. 1850, i.e., four of the eight years that Bettelheim spent here. Enquiries at British archives (the National Archives and those archive institutions associated with the patron of the LNM and its most active committee members) and through the British archival resource Internet website, 'Access to Archives' (A2A), have produced no results in the hunt, though the search continues. Curiously, the Mar.–Apr. 1846 gap (when Bettelheim was in Canton) is filled by a transcript in the LNM letters section. Someone, it seems, transcribed and did not return the original, or even maybe destroyed it. (For further information, see www.mundus.ac.uk/cats/44/1226.htm)

The Ryudai MSS

What of the top copy that Bettelheim took back, not to Britain but to the US? Regrettably, there was a fire at his family home in the late 19th-century and it seems that the journal and other papers were largely destroyed, three sections of his journal only surviving, along with two gatherings of letters.

In 1969, Dr Teruya completed his dissertation and thereafter successfully encouraged Bettelheim's descendants to place the surviving MSS in the Ryudai library. By remarkable good fortune, two of those three sections of the journal cover parts of the journal that are missing from the UBL collection, that is to say, 17 Oct. 1846 to 7 July 1847, and 7 Apr. to 16 July 1854 (i.e. the day before Bettelheim's departure from Ryukyu in 1854), the

ている（1846年10月17日から1847年7月7日までと、1854年4月7日からベッテルハイムが琉球を離れる前日の7月16日まで。2冊目は、3月7日から4月6日までを含んでいる）。もう1冊はバーミンガム大学図書館コレクションと重複している（1853年4月2日～7月25日）が、この重複のおかげで、バーミンガム大学図書館本にある多くの些細な問題点（例えばカーボン紙がきちんと入れられていなかった部分や、英国琉球海軍伝道会のメンバーによる欄外や下線の書き込み等）を、この1冊を参照しつつある程度まで明らかにすることができる。つまり、附属図書館にある手稿資料は、現在までに確認されている日記の約1/5に相当することになる。

1846年以降のある時期からベッテルハイムは、琉球王府に宛てた中国語の公式書簡の英訳コピーを保管し始めている。公式書簡は1846年から1850年まで続き、大きく欠落した日記（1847～1850年）の穴埋めをしてくれる。少なくとも、ベッテルハイムと琉球王府との主な軋轢の内容を理解するのに役立つ。ベッテルハイムと琉球王府の間には、多くの軋轢があった。1850年からの書簡は、日記に組み込まれている。書簡集は、1981年にサムエル・向田博士のご厚意により附属図書館に収められたものだが、その来歴は解明されていない。照屋教授を通して譲り受けたもう1冊の書簡集には、1852～53年の間の、教会指導者や宣教師、英国琉球海軍伝道会の支援者など、様々な団体や個人宛の書簡が入っている（ref.: K190.28 BE, 日記 0000502145801, 書簡 0000502388451）。

¶アール・ブールの翻刻

当時、米国にあったベッテルハイム日記の原本と残っていたその他の書類は、アール・ブール牧師の関心を引いた。20世紀初めに、安里（那覇）と首里を拠点に伝道活動を行ったブール牧師は、ベッテルハイム研究の復興に大きく貢献した人物で、彼のコレクションは附属図書館に保管され、20世紀初期の沖縄研究資料として高い評価を得ている。ブールは、現在附属図書館に所蔵されている日記を、ベッテルハイムが1854年に香港へ戻った後に書かれた琉球印象記とあわせて翻刻した（ref.: K190.28 BE, 日記 0000502064998, 回顧 0000502064983）。彼はまた、現在では原本の行方が不明となっているベッテルハイム夫人の琉球滞在印象記も、断片的に翻刻している（ref.: 0000502064983, pp. 116–49）。

ブール牧師も他の研究者と同様、ベッテルハイム特有の手書き文字に苦労した。ベッテルハイムはしばしば自身をオーストリア人だと語っていたが、実はハンガリー出身であった。彼は、日記や中国語で書いた書簡の翻訳に、鉄筆による複写器を用い、判読しにくい文字で書いている。その上、琉球大学附属図書館が所蔵している複写したカーボン紙の押跡を読む時は、裏側を鏡に映して読まなければならないこともあり、煩雑きわまりない。

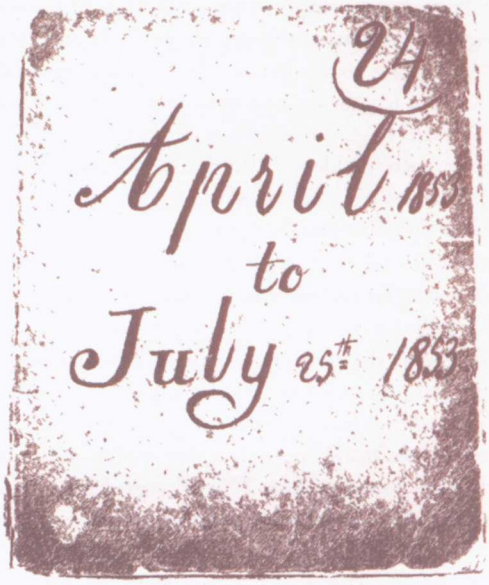
latter though also covering 7 Mar. to 6 Apr. The third homemade gathering duplicates the UBL material (2 Apr.–25 July 1853), but that part solves many small problems in the UBL version caused, for example, by careless placing of the carbon paper, as well as indicating what the LNM committee members added (e.g. marginalia and underlinings). To sum up, the Ryudai MSS represent something less than one-fifth of the surviving journal.

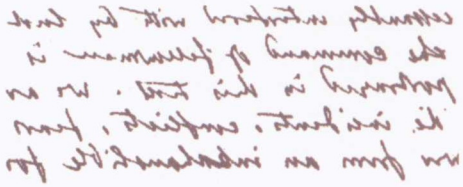
At some point after 1846, Bettelheim decided that he ought to file and preserve English translations of his official Chinese letters to the Shuri authorities. Those letters, covering the years 1846–50, thus provide a narrow bridge covering the large missing part of the journal (1847–50). At least, they are some kind of guide to what Bettelheim's principal disputes with Shuri were in those years, for disputes there were many. From 1850 such correspondence is incorporated into the journal. The library obtained those copy letters in 1981 thanks to a gift of Dr Samuel Mukaida, though their earlier provenance is unclear. The second gathering (part of Dr Teruya's accession) covering parts of 1852 and 1853 are to various bodies and individuals including church authorities, missionaries and LNM supporters. (refs.: K190.28 BE, journals 000050214580l; letters 0000502388451)

The Earl Bull Transcripts

While they were still in the US, the top copy of the surviving journal and other papers attracted the Rev. Earl Bull, an early 20th-century missionary based at Asato (Naha), and Shuri. He was Bettelheim's champion and rehabilitator, whose collection of papers held at Ryudai Library is so rich a source for early 20th-century Okinawa. He transcribed parts of the journal which are now housed at Ryudai, also Bettelheim's reflections on his time in Ryukyu, written when the missionary was back in Hong Kong in 1854 (ref.: K190.28 BE, journal transcript 0000502064998; reflections 0000502064983). He also transcribed a fragment of Mrs Bettelheim's reflections on her years in Okinawa (ref.: 0000502064983, pp. 116–49), though the location of the original is now uncertain, as is that of Bettelheim's own retrospective piece.

Bull was as foxed by the problems inherent in dealing with Bettelheim's MSS as are many others. Bettelheim, a native Hungarian, though describing himself as Austrian, wrote in a difficult hand using the manifold writer stylus for his journal and translations of his Chinese letters etc. As for other problems, one sometimes has to use a mirror to read the carbon impression of the top (i.e. Ryudai) copy from the reverse. Japanese scholars studying that period consider Bettelheim's handwriting notoriously hard. Not a native English speaker, Bettelheim used words curiously and quite often invented his own. Moreover, his word order in his often tremendously long sentences is sometimes un-English. It is not surprising that Bull's transcripts contain some errors and gaps, but at least his notebooks are in more robust physical condition than Bettelheim's MSS.





ベッテルハイムの日記・第24集の表紙(上)。琉球大学附属図書館が所蔵している、3冊の日記の内のひとつである。下は本人による手書きの本文。筆跡は、カーボン紙を敷いていた裏面に鏡像で残っており、鏡に映した時にのみ正しく読める。お試しあれ。

Above: the cover of the 24th section of Bettelheim's journal, one of the three surviving held at Ryudai library, and five lines of his handwriting. The carbon impression, when clear only from the reverse, has to be read with a mirror, as indicated here. Try it!

日本人研究者には、ベッテルハイムの手書き文字の判読は非常に困難なものとして知られている。英語が母国語ではないベッテルハイムの言葉遣いは奇妙であり、言葉を勝手に創り出すことも頻繁にあった。さらに、文法を無視した語順で極端に長い文章を書き、とても英語とは言えないものであることもある。ブール牧師の翻刻に間違いや欠落があることも驚くにはあたらないが、少なくともベッテルハイムの手稿資料より紙質は強く、保存状態もよい。

¶保存状態とマイクロフィルム版

琉球大学附属図書館に保管されているベッテルハイムの5冊の日記と書簡集は、部分的にはまずまずの状態である。しかし、中には茶色の表紙から染み出した酸性物質や、湿気、カビ等が原因で損傷を受けた部分があり、最初の2行がまったく失われてしまったページもある。日記や書簡集の損傷のある部分は紙が非常に脆くなり、外

Physical Condition and the Microfilm version

The five gatherings of the Bettelheim journal and letters held at Ryudai are partly in fair condition, but parts are victims of problems arising from acidity migrating from their brown paper covers, and damp and mould damage (with consequent loss in some places of as much as the two top lines). The damaged sections of the journal and letters are, as a consequence, extremely fragile, and flaking badly at the outer margins on certain pages. To read the MSS, a blunt paper knife proved best for turning the pages. The very minimum of human skin contact with the flimsy, brittle parts is absolutely necessary. These papers, so symbolically and informationally important for the Perry era and the beginnings of Japan's modernisation, are in very urgent need of professional conservation.

The UBL version of the journal and of the other LNM surviving papers have been microfilmed by a commercial publishing company that specialises in microfilming MSS (Adam Matthew Publications), thus saving the originals from further damage that would result from handling. Ryudai library has bought a set of the microfilms (ref.: K290.99/CH 0000990144696, -709, -713, -728, -732), as has the Prefectural Archives. The library, though, purchased a copy of the whole CMS archive, i.e. including the papers relating to its activities in Japan, some 36 reels in all. There is a printed booklet containing a catalogue and guide to the contents of the films. For those who might find Bettelheim's script hard or impossible to read, it should be noted that both the LNM printed annual reports and circular letters to its subscribers contain key extracts from the journal. Here, we are in some luck since there is material from parts of the missing years (i.e. 1847–50). The journal, long as it is, only accounts for the larger part of the second of the five reels. The other reels are concerned with the business papers of the LNM, e.g. the (mostly printed) reports, correspondence, financial papers, circulars to the membership, etc., much of it duplicated, and far more accessible than Bettelheim's handwriting.

Conclusion

The Prefecture's Institute of Historiography is considering publication of an edition of the Bettelheim journal in its *Prefectural History of Okinawa* series. The surviving parts of the journal, as transcribed single-spaced on to A4 paper, would amount to about 1,700 pages without introduction or indexes. Bettelheim was indeed an indefatigable writer but one with many problems associated with his script and taxis, not to mention the historian's discrimination that has to be exercised in assessing the impact his personality had on his reliability as a historical source.

縁が薄片となってひどくはがれ落ちてしまっているページもある。手稿資料のページをめくるには、縁の鋭くないペーパーナイフが一番適している。脆くなった紙を扱う際には、手で触れることを最小限に留めることがなにより肝心である。日本の近代化が始まったペリー来航当時の重要な情報を含み、かつ時代を象徴するこれらの資料は、専門家による緊急の補修を必要としている。

バーミンガム大学図書館の原本と、英国琉球海軍伝道会のその他の文書は、手に触れることによって生じる損傷を食い止め原本を保存するため、専門の会社（Adam Matthew Publications）に委託しマイクロフィルム化されており、附属図書館と沖縄県公文書館はこれを購入している（ref.: K290.99/CH 0000990144696, -709, -713, -728, -732）。また附属図書館は、英国教会伝道会の日本での活動に関係する文書を含む全36巻からなる資料も購入しており、これにはマイクロフィルムの目録と内容説明の冊子が付属している。ベッテルハイムの手書き文字の判読が困難な方のために、この冊子には英国琉球海軍伝道会が発行した年報や伝道活動支援者に送る年次通信に、日記の主要な抜粋があることを記しておく。幸運なことに、日記の欠落した部分（1847～50年）をここに参照できる。日記は膨大な長さではあるが、5個のリール中の2番目のリールの過半数を占めるに過ぎず、他は印刷された英国琉球海軍伝道会の報告書、書簡、財務書類、会員への回覧等の事務書類であり、ベッテルハイムの手書き文字よりはるかに読みやすくなっている。

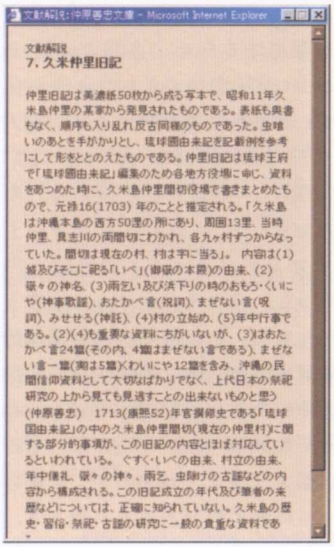
¶結びに

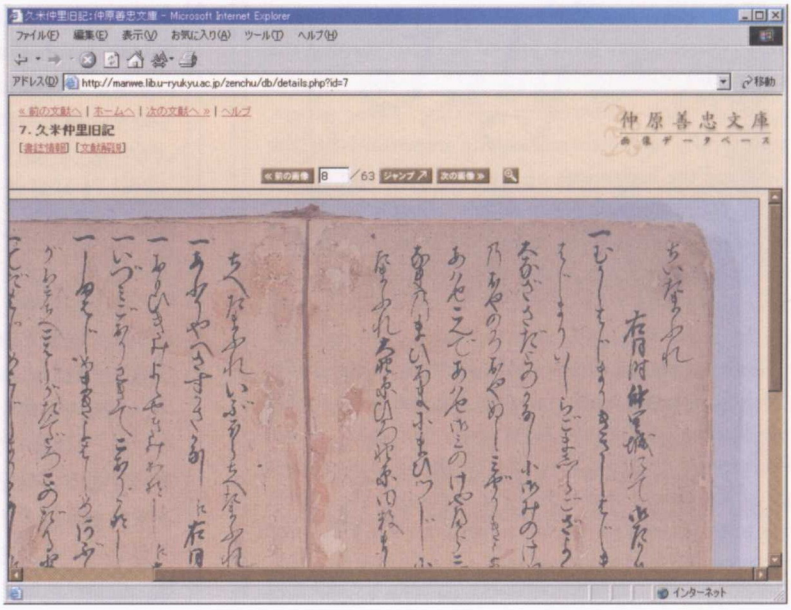
沖縄県史料編集室では、「沖縄県史」のシリーズの中でベッテルハイムの日記を出版することを検討している。残存する日記とこれに関連する書簡の翻刻は、解説や索引を除いてもA4紙で優に1700ページを超え、ベッテルハイムが倦むことのない稀代な筆まめであったことがうかがえる。ベッテルハイムの筆跡や文章構成から派生する問題だけでなく、資料としての信頼性を考慮する際、歴史を研究する者として、ベッテルハイムの性格の影響をいかに見極め判断するかについて多くの課題を抱えている。

*

編集注）琉球大学附属図書館が所蔵するベッテルハイムの日記・書簡類は、19世紀前期の薄い洋紙が使用され、酸性により非常に脆くなっている。このため保存上の理由から閲覧は禁止されている。ジェンキンズ教授は、古文書管理の専門的知識を持ち細心の注意を以って資料を扱えること、彼の貴重な翻刻の成果が今後の研究への多大な貢献となること、当館資料が修復され、マイクロフィルム化されるまでの間の代用資料となりうることなどから、今回特別に閲覧・翻刻が許可されたものである。

仲原善忠文庫
画像データベースを公開



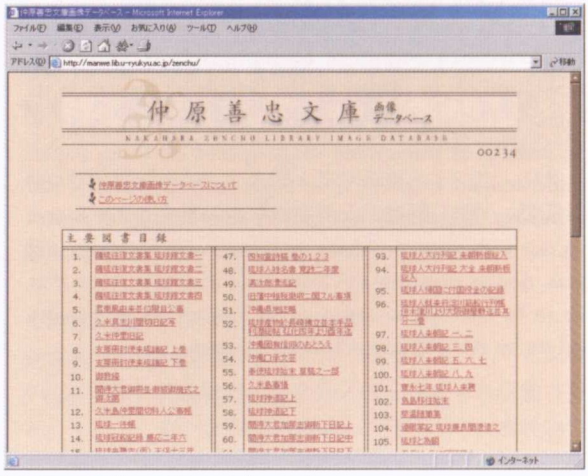


琉球大学附属図書館は、日本学術振興会より平成 15 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受け、電子化に取り組んできた「仲原善忠文庫画像データベース」を完成し、5 月 21 日より Web サイト上に正式公開いたしました。

仲原善忠文庫は、琉球大学附属図書館が 1966 年に、仲原善忠が生前研究に使用されていた資料を、ご遺族との交渉を経て譲渡いただいたコレクションです。仲原善忠（1890 ～ 1964）は、伊波普猷と並んで、琉球古歌謡集である『おもろさうし』の研究や 琉球歴史研究に大きな業績を残された沖縄学の研究者です。仲原善忠が久米島の出身であるため、文庫に久米島関係の資料が含まれていることも特徴の一つです。

仲原善忠文庫 3,288 冊のうち、463 冊の貴重な沖縄関係資料がありますが、今回はそのなかでも特に貴重な 136 点を電子化いたしました。この中には、『仲原本おもろさうし』『久米仲里旧記』『久米具志川間切旧記』『聞得大君加那志御新下日記』『君南風由来并位階且公事』などが含まれています。『仲原本おもろさうし』の今回の公開によって、沖縄県立博物館所蔵の尚家本を除く「おもろさうし」の定本（『仲吉本おもろさうし』『田島本おもろさうし』）が揃って、附属図書館 Web サイト上で公開されることとなり、今後の研究に貢献することが期待されます。その他、薩摩・中国との関係を示す資料、江戸上りに関する資料なども多く含まれており、沖縄の歴史・民俗研究や島嶼研究にもさらなる展開が期待されます。

今回電子化した資料は、そのほとんどが原本・写本・稀覯本であるため、利用には制限を設けられている資料です。本文庫の画像を公開することによって、原資料の保存を図るとともに、利用者の閲覧が容易なものとなり、これまで制作公開してきた「宮良殿内文庫画像データベース」「伊波普猷文庫画像データベース」「仲宗根政善言語資料画像情報データベース」「琉球語音声データベース」などとともに、沖縄の総合的な学術研究に大きく寄与できれば幸いです。



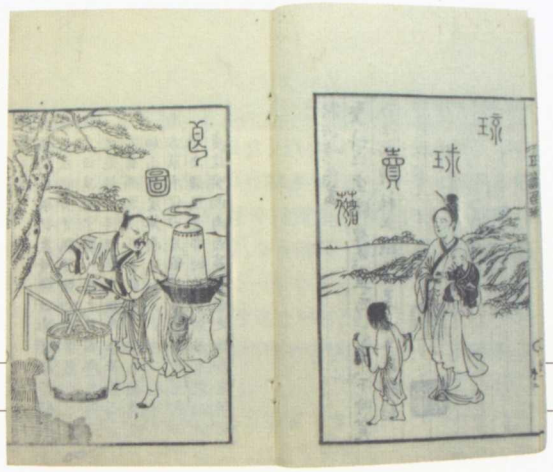
http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/zenchu/

2003年度新収蔵 沖縄関係資料のご紹介

新たに4点を収集いたしました

1. 琉歌輯　光緒元年（1875）写本
   懐中用の琉歌集で、約290首の琉歌が記されている。作者がわかるものについては朱で名前が記されている。後半は手習いの紙の裏に歌が書かれている。使われている紙は唐紙と思われる。表紙には「朝公」とあり、その裏には「喜納誌」とある。最初の頁には「喜納」の丸印がある。
2. 唐国戦争聞書集　写本
   アヘン戦争（1840～42）に関連し、日本周辺への異国船の出没についての危惧を背景に、それらに関する情報、とりわけ琉球・朝鮮からの情報をとりまとめたもの。裏表紙に「中巴蔵」とある。琉球からのものは薩摩を通じた報告が中心である。アヘン戦争を受けた幕藩体制の動揺を物語る資料。
3. 甘藷百珍　天明3年（1783）木版
   甘藷の来歴等を各種資料、例えば「中山伝信録」等から説き起こした上で、甘藷を用いた料理123種を紹介した料理のテキスト。序文の次には2頁を使って「琉球売藷之図」が掲載されている。
4. 銅刻琉球國全圖　明治7年（1874）銅板多色刷
   江戸期には、琉球図は版本ではわずかに2～3種しか出ておらず、それも林子平の「三国通覧図説」か、その焼き直しであったが、明治に入ってかなり正確な地図が刊行されるようになった。本地図は明治に入って2番目に刊行されたもので、絵は小林居啓、刊行は青江秀になるものである。青江秀は蝦夷図などの銅板地図を多く刊行している。

▶甘藷百珍



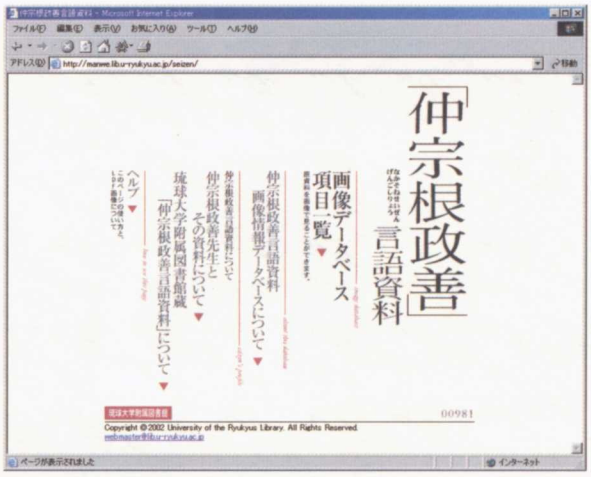
仲宗根政善言語資料 画像情報データベース

公開記者会見を行いました

「仲宗根政善言語資料画像情報データベース」の公開記者会見を、5月12日、本館多目的ホールで行いました。データベースは、すでに図書館Webサイトにて公開しておりますが、研究者から報道機関を通して広く一般に広報してほしいとの要望があり、実施いたしました。

仲宗根政善（1907～1995）は、琉球方言の研究者であり、『沖縄今帰仁方言辞典』の著書で知られております。また、初代琉球大学附属図書館長、琉球大学副学長、ひめゆり平和祈念資料館初代館長を務められました。

附属図書館が所蔵する仲宗根政善言語資料には、直筆の方言研究に関する調査ノートやひめゆりの塔追憶記の一部、大学教育について記述したメモなど沖縄研究に関する貴重な資料が数多く、このデータベースが沖縄の総合的な学術研究に大きく貢献することが期待されます。琉球大学附属図書館は、今後も沖縄関係資料の収集と貴重資料の電子化に積極的に取り組んでいく方針です。



http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/seizen/

「EU資料展」開催

日・EU フレンドシップウィーク

5月12日～25日の2週間、本館2階情報ラウンジにおいて、「EU資料展」を開催しました。これは、駐日欧州委員会代表部が主催する「日・EU フレンドシップウィーク」の一環として企画したものです。

「日・EU フレンドシップウィーク」は、2000年7月の九州・沖縄サミットをきっかけとして始められ、スポーツ・文化・学術などの交流イベントを通して欧州連合（EU）に関する理解を深めることを目的に、毎年5月に全国で開催されています。

今回、琉球大学附属図書館は、EU 資料センターに指定されていることから、沖縄県内の研究者や一般利用者に EU 資料について関心を持っていただくため、「EU 資料展」と題して、当館に所蔵されている EU を紹介する出版物や EU の発行する統計資料など約100点の資料を展示いたしました。あわせて、EU 広報誌『Europe』最新号やパンフレット、EU グッズのほか、日・EU フレンドシップウィーク絵画コンクール小学校低学年部門で入選された読谷村立喜名小学校3年真栄田海来さんの絵のポストカード等も配布いたしました。

沖縄では初めてのイベントでしたが、約400人の方にご観覧いただくことができ、風船などで飾り付けられた華やかな会場と相まって大変盛況でした。アンケートには、「拡大 EU に関する情報を身近に感じられて良かった」などの感想が多く寄せられ、EU に対する関心が高いことがうかがわれました。

◀真栄田海来さん画のポストカード

研究個室の利用について

静かな環境で研究・学習に最適

琉球大学の教職員及び大学院生の方は、図書館の資料等を使っての研究・調査のために、本館1階の研究個室を利用することができます。5室があり、事前の予約と10日間以下の継続利用が可能です。また、LANに接続することはできませんが、個人のパソコンを持ち込み利用することも可能です。

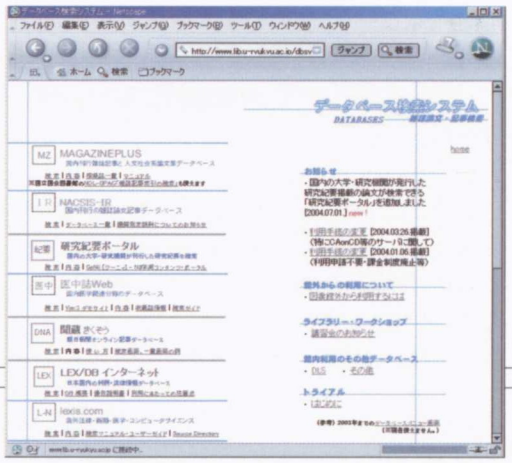
研究個室は静かな環境で研究・学習に最適です。どうぞご活用下さい。

データベース検索システム課金制度の廃止

アクセスしやすくなりました

これまでイントラネットで提供しておりました「データベース検索システム」のうち3種（BA、BA/RRM、PsycINFO）をWeb版に切り替えました。これにともない、1月1日より、「データベース検索システム」のすべてのデータベースについて、利用申請および課金制度を廃止いたしました。大変利用しやすい環境になりましたので、一層のご活用をお願いいたします。

また、MEDLINEにつきましては、「データベース検索システム」からのサービスを停止いたしました。今後は、PubMed（http://www.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/）のご利用をおすすめいたします。



ILLサービスの変更

より広く早くなりました

4月1日、国立情報学研究所（NII）により「ILL文献複写等料金相殺サービス」が開始され、琉球大学附属図書館もこれに参加いたしました。事務処理の効率化によるサービスの向上が図られ、主な変更点としては、1. 校費で支払可能な機関が大幅に拡大、2. 個別の払込手数料が不要な機関が大幅に拡大、3. 現物貸借の支払は切手ではなく現金に、なりました。

また、3月5日、「大学図書館間協力における資料複製に関する利用許諾契約書」の調印が、日本著作出版権管理システム、学術著作権協会と国公私立大学図書館協力委員会との間になされました。これにより、両団体が複写許諾管理を委託されている著作物について、大学図書館間のILLでのファクシミリ送信、文献画像伝送システムによる送信などが許諾されました。琉球大学附属図書館は、これまで地理的条件から郵送に時間がかっておりましたが、必要な研究資料をより早く安価に入手することができるようになりました。

お　知　ら　せ

開館カレンダー（2004年度）

●本館

8月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

9月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

10月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

11月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

●医分館

8月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

9月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

10月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

11月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

開館時間：【黒】8:30～22:00　【緑】13:00～20:00（分館は 13:00～18:00）　【青】8:30～17:00　【赤】休館

本館だより

＜第 245 回附属図書館運営委員会録＞

平成 16 年 3 月 19 日

○協議事項

1. 電子ジャーナルの維持について（継続）
2. 琉球大学附属図書館利用規程の改正について
3. 琉球大学附属図書館文献複写規程の改正について
4. 琉球大学附属図書館文献複写料金徴収猶予規程の廃止について
5. 附属図書館研究開発室員の推薦について

○報告事項

1. 附属図書館医学部分館長について
2. 附属図書館運営委員会の交替について
3. 各種委員会委員について

医分館だより

＜第 52 回医学部分館運営委員会録＞

平成 16 年 7 月 13 日

○協議事項

1. 平成 16 年度図書館備付け学生用図書の選択について
2. コアジャーナルの購読形態について

係名と配置の変更がありました

国立大学の独立行政法人化にあたり、4 月 1 日より一部の係名と配置を変更いたしました。組織形態は変わりませんが、今後もサービス品質の確保にいっそう努めたいと思います。

係名の変更：　資料情報係　→　資料受入係
　　データベース係　→　目録管理係

配置の変更：　電子情報係…本館 3 階　→　本館 2 階
　　専門員……医学部分館　→　本館 2 階

長期貸出の開始

夏季休業にともない、7 月 23 日から 9 月 22 日（医分館は 9 月 23 日）の間、長期貸出を行います。この期間に借りた本の返却期限は 10 月 8 日となります。

この間に借りた本は　医分館は 23　この日に返却

07.23–09.22 ⟶ 10.08

■編集後記

図書館で「どうして新しい本が少ないの？」という質問をよく聞きます。蔵書約 95 万冊に対して年間受入は 2 万冊弱なので、「新しい本」を過去 3 年としてもその割合は 6% ほどです。新しい本が少ないというよりは古い本が多くあるのです。そのほとんどは今では入手困難なものです。図書館の重要な役割の一つに、資料の保存があります。紙は保存に優れており、質の良い和紙などは環境が良ければ千年は残ります。けれども今回特集のベッテルハイムの手稿資料のように、酸性等の影響を受けると紙は脆くなり寿命が短くなってしまいます。このため図書館は、貸出等のサービスを行う一方で、資料を修復したり、環境を整え保存に努めています。こうして図書館は、未来の研究者に資料を届けているのです。

琉球大学附属図書館報『びぶりお』　第 37 巻第 2 号（通巻第 140 号）
発行日：2004 年（平成 16 年）8 月 1 日

発行：琉球大学附属図書館　　編集：びぶりお編集委員会
〒 903-0214　沖縄県中頭郡西原町字千原 1 番地
TEL: 098-895-8168　Email: referen@lib.u-ryukyu.ac.jp